

2018 年度前期 授業改善アンケート集計結果に対するコメント

—法学部—

法学部長 山本 輝之

授業改善アンケートの結果から何をどのように汲み取り、今後の授業改善に繋げていくかは、個々の教員の判断にゆだねられている。

そのことを前提としたうえで、全体的な集計結果から見ると、昨年度後期とは質問内容が異なる（昨年度後期の質問内容は、「予習または復習をよくした」）ため、単純比較はできないが、今年度の「授業中、この授業の内容を理解するために努力した（ノートをとる等）」という質問項目の平均値が上がっている（昨年度後期の質問内容に対する平均値は、3.57 点、今年度は、3.92 点）ことは注目に値する。他方、「この授業のレベルはあなたにとって適切であった」という質問項目の平均値は、昨年度後期より若干であるが下がっている（昨年度後期は 4.09 点、今年度は、4.01 点）。また、これも、昨年度後期とは質問内容が異なっている（昨年度後期の質問内容は、「総合的にこの授業を評価できる」）が、今年度の「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義であった」という質問項目の平均値も下がっており（昨年度後期の質問内容に対する平均値は、4.39 点、今年度は、4.13 点）、気になるところである。

今回の集計結果から、以下のことがいえるように思われる。教員は、高度で難解な科目内容を学生が分かりやすく理解できるよう様々な努力・工夫をされ、それが、大方の学生の勉学意欲・努力を引き出すことにつながり成果をあげつつある。しかし、他方で、授業のレベルに追いつくことができず、授業を有意義であったと感じることができない学生もある程度の割合でいる。教員の側でも、このようなことを再度意識し、今後も引き続き、学生の勉学意欲・努力を引き出す努力を重ねていくとともに、学生がその内容を十分に理解し、有意義であったと感じることができるよう、尽力していく所存である。

以上